# 序

昭和十年の秋、外務省第三種補給生に選拔せられ、はるばる笈を負つて北京に留學した私の研究題目は「近代支那文化の研究」であつた。しかし、私が實際研究して見たいと思つたのは、近代支那における支那思想研究の方法論的探究にあつた。私はこの目的のため三年の留學中、できうる限りの資料を蒐集したのであるが、近代の思想家や學者の業績を探究してゐる中に、私の關心は單に思想研究の方法論的な問題に止まらず、近代思想そのものにまで擴大するやうになつた。私が始に研究しようと思つた方法論的な問題は、結局近代思想そのものの究明をまつてはじめて闡明さるべきものであると思つたからである。のみならず、近代支那思想は學界においてはいふまでなく、東亞政策の立場からも日本の支那學界において是非とも研究しなければならぬといふことを痛感するやうになつた。「近代支那思想史論」を書いて見る氣になつたのは極めて最近のことであるが、私が近代支那思想の研究に着手するやうになつた經緯は右のやうな次第である。

爾來、私は「近代支那思想史論」の資料を蒐集する旁ら、近代支那の思想家並に學者の著作の

飜譯とこれに關する覺書的な論文を、機會ある毎に二三の雜誌に發表して來た。一昨年及び昨年、郭湛波著『近五十年中國思想史』の前篇を『現代支那思想史』とし、又同書の後篇と蔡尙志氏の論文その他を『現代支那思想の諸問題』として編譯刊行したのはこの意味であつた。今後もなほ飜譯紹介したい著作や、又現に飜譯中の著書もあるが、自分の研究を促進するには何等かの形において過去の研究を整理する必要のあることを痛感するに至つた。そこで私は今まで發表した舊稿を蒐めて見たところ、二十餘篇あることを發見した。これらの舊稿は、今讀んでみると餘りに未熟で自分ながら到底公にする勇氣の出ないやうなものもあつたが、整理してまとめておけば、今後この方面の研究を志す人に何程の役に立つかは別としても、自分の研究を整理する爲には意義のあることであると思つた。そこで私は比較的重要な題目で、しかも內容的に今後の研究に役立ちうるやうなものだけ十一篇を選んで本書を編纂したのである。

右に述べたやうな事情で、本書に收錄した論文は別に始めから體系的な著書にするために一貫した目的で書いたものではなく、むしろその時々の雜誌編輯者の要求や自分の感興によつて書いたものが多いため、本書には一定の體系といふものもなく、又個々の論文の內容や長短にも一定の目標がある譯ではない。だから、本書を研究と銘打つて公刊するといふやうなことは、私自身には內心忸怩たるものがある。それにもかかはらず、私が本書を公刊するのは、すでに述べたごとく、全く本書を公刊することによつて、廣く江湖の示敎を仰ぎ、それによつて進んで私の現在の研究を促進したいといふ念願からである。

本書にいかなる學問的意義があるかどうか私には充分の自信はない。しかし、本書が東亞新文化創造といふ日本の文化的使命にいささかでも役立つことがあらば、私にとつては實に望外の喜である。

なほ本書の出版について種々御配慮を戴いた高田眞治先生、並にお忙しい中を進んで校正その他の勞をとつて下さつた齋藤秋男君に心から感謝の意を表したい。

昭和十六年六月

著　者

# 目次

近代支那における文化運動の史的段階

一　近代支那における文化運動の史的段階……一
二　自由主義文化運動の萌芽期……二
三　初期自由主義文化運動期……四
四　自由主義文化運動期……六
五　社會主義文化運動期……八
六　民族主義文化運動期……一〇

現代支那の思想的潮流

一　現代支那思想の歴史的變化……一三

二　傳統主義的潮流……三
三　自由主義的潮流……二五
四　社會主義的潮流……二八
五　民族主義的潮流……三二

現代支那學の思想的考察

一　まへがき……三七
二　傳統主義的潮流……三九
三　自由主義的潮流……四五
四　社會主義的潮流……五二
五　民族主義的潮流……五七

思想革命とその歴史的意義

一　思想革命の政治社會的基礎……六八
二　反儒教運動の經過とその本質……七四
三　思想革命家の新世界觀……八七
四　思想革命の影響……九七
五　思想革命の歴史的意義……一〇五

國故整理運動の學術的意義

一　はしがき……一一〇
二　國故整理運動の對象……一一二
三　國故整理運動の源流……一一九
四　國故整理運動の影響……一二六

新生活運動の理論と實際

一　新生活運動の實際……一三
一、新生活運動の發端……一三

二、新生活運動の發展……一三三
三、新生活運動の實際的影響……一三七
二　新生活運動の理論……一四一
一、新生活運動綱要大意……一四一
二、生活三化初步推行方案……一四四
三、新生活運動の本質……一四八
三　新生活運動の歷史的意義……一五六
一、政治史的意義……一五八
二、社會史的意義……一五八
三、思想史的意義……一五九
新啓蒙運動（新五四運動）點描……一六一
一　事變前支那文化界の趨勢……一六七
二　新啓蒙運動の發端と經過……一七一
三　新啓蒙運動の特質……一七五



支那民族主義の思想原理
一　支那事變と支那民族主義……一七九
二　支那民族主義の發生……一八四
三　自由主義と反封建主義……一八七
四　社會主義と反帝國主義……一九二
五　全體主義と抗日主義……一九六
孫文主義の儒教的基礎
一　はしがき……二〇一
二　儒教主義の本質……二〇三
三　儒教主義と歷史的支那の性格……二〇七
四　孫文主義の本質……二一〇
五　孫文主義と現代支那……二一四

六　儒教主義と孫文主義……二二八

## 最近の支那思想界

一　最近の支那思想界の動向……二二三
二　第三回哲學會の盛況……二二七
三　外國思想の編譯……二四三
四　支那思想の研究……二四六
五　哲學の大衆化運動……二四八

## 事變直後の北京文化界

……二五五

## 附　錄

### 一　現代支那思想關係邦文參考圖書解題

一、思想一般……二九一
二、三民主義……二九三
三、學　術（支那學）……二九六

### 二　孫文主義關係文獻目錄及び解說

凡　例……二九九
一、支那革命に關する主要文獻の解說……三〇〇
二、支那革命に關するその他の文獻目錄……三〇五
三、中國國民黨に關する主要文獻の解說……三〇八
四、中國國民黨に關するその他の文獻目錄……三一二
五、孫文傳に關する主要文獻の解說……三一四
六、孫文傳に關するその他の文獻目錄……三一七
七、孫文著作に關する主要文獻の解說……三一八
八、孫文著作に關するその他の文獻目錄……三二〇
九、三民主義研究に關する主要文獻の解說……三二二
十、三民主義研究に關するその他の文獻目錄……三二三
十一、其　他……三二五

合的見地に到達し得るのである。

以上の意味において新啓蒙運動は五四文化運動の正しき意義と現代の要求をはつきり認識し、五四文化運動の示した批判的精神を益々擴充發展させることによつて五四文化運動の缺陷を補足し、現代の要求を滿し、明日の支那文化を創造せんとするものである。

（昭和十三年九月『中國文學』所載）

註　中國文學建設協會編『十年來の中國』（上下二册）二十六年七月商務印書館發行。尙同論文は英文雜誌『天下』の一九三七年三月號に Philosophy Chronicles と題して掲載され、同論文はまた『中國文學月報』第三十五號に「支那思想史における外來文化」として小野忍氏の譯文がある。

# 支那民族主義の思想原理

## 一　支那事變と支那民族主義

時局の發展と推移の中から支那事變の世界史的意義がますます明瞭に且つ愈々深刻に認識されつつあることはあまねく人の感知しつつあるところである。だがこれと同時に支那の歷史的發展の母胎が、單に歐米やソ聯等のいはば外的勢力に依存するのみでなく、實は支那自體の民族的自覺卽ち民族主義に深く胚胎するものだといふことが次第に深く認識され、同時に解決を要する切實な問題として提起されつつあることは注目すべきことである。たとへば昨年十一月三日の帝國政府の聲明も、論壇にあらはれた「東亞協同體」思想もその中において意識されると否とにかかはらず、支那民族主義の再認識に出發してゐることは事實である。又去る議會において從來の三民主義に對する態度とはなはだ異る政府の意見が闡明された、といふことも明かにその反映であらう。その他論壇ジャーナリズムは云ふまでもなく、一般知識階級の間に眞劍にこの民族の問題

が關心されつつあることは私が敢へて指摘するまでもないことである。喜多清一氏はこの支那における民族の問題をまことに明快率直に次のごとく述べて居られる。

「二十世紀の世紀的事件とは何であるかと問はれた時、恐らく後世の史家は、支那の民族的覺醒をその最大なるものの一つとして算へざるを得ないだらう。その覺醒の方向と態樣とが如何なるものであるにせよ、我々はこの事實の偉大な力を現實に感ぜざるを得ないし、そしてそれを正しく理解することなしには、東洋の、それは言ふまでもなく日本の、現在及び將來の問題を解決することは到底出來ないのである。」

しかしながら、われわれは果して支那民族主義の實體を誤りなく認識してゐるかといへば、私は日本における驚くべき支那知識の貧困を見出さざるを得ないのである。

支那事變以來、支那には國家思想は存在しないとか、支那には政治的統一國家はあり得ないとか恰も國民は商利にのみ關心を有して、愛國心など持たないことが彼等の先天的固定的性質であるといふ舊來の支那觀は次第に修正されつつあることは事實であらう。だが支那民族主義の實相についての正確な知識といへば、支那に關心をもち、支那を論ずる人々に於てさへ、はなはだ鮮明を缺く危惧さへ感ぜられる。たとへば支那民族主義といへば三民主義の民族主義、或は共產黨の抗日主義をそのすべてであるごとく認識し、しかもこれらの思想の社會的、歷史的意義を理解せず、只盲目的にそれが支那事變の原因であり、それを排擊せねばならぬ樣に錯覺してゐる人が少くないのが日本の實情である。

さきに私は昨年帝國政府が新秩序の建設を聲明し、論壇において「東亞協同體」が提唱された事實に言及した。帝國政府の聲明、「東亞協同體」の思想は確かに事變に對する日本の眞意の告白として、一部に反對はあるにせよ、日本の國民的輿論となつたといへるであらう。しかるにひるがへつて考へた時、政府の聲明や「東亞協同體」思想によつていかなる政策があらはれ、いかなる行動があらはれたであらうか。

具體的政策綱領を求むる要請愈々切なるにもかかはらず、これに對する明確なる解答が現れず民族協同の聲益々切なるにかかはらず、現實は刻々にこれと離反しつつあることを政府はいかに考へ「東亞協同體」論者はこの事態をいかに指導するであらうか。私は政府聲明の抽象性や、「東亞協同體」の空想性を非難する積りはない。だがいかなる眞實のこもつた言葉も、又いかなる誠意にあふれた言葉も、只その時、その場の單なる告白だけであつては人を信服することも說得せしむることもできないであらう、といふことは充分反省されなければならぬ。

だがこのやうな「東亞協同體」の思想の弱點は何に基因するであらうか。それは現實を無視した空想の所產でもなく、机上の空想から生れた觀念遊戯のためでもなく、歷史的觀點の缺如である。支那事變に對する歷史的、民族的意義が充分認識されてゐないことに基くものである。かかる缺點はひとり東亞協同體理論のみでなく、多かれ少かれ日本のジャーナリズムの通弊であるが、われわれは過去における事實がいかなるものであるにせよ事實は事實として認める立場と努力とを怠つてはならない。いかなる現實の問題も常に過去の歷史につながりを持たないものはありえないのである。すべての問題は歷史のつながりを正しく理解することによつてはじめて正しく理解され、正しく解決することができるものである。

支那事變の歷史的意義は各人各樣に說かれてゐるが、私見をもつて一言すれば、事變の本質は日本國家主義と支那民族主義の相剋鬪爭である、と言つても過言ではないかと思ふ。事變以來すでに二ヶ年、日本のあらゆる努力にもかかはらず、日支關係における民族主義の問題は依然として愈々深刻に對立抗爭しつつある樣に見えるのは、益々このことを雄辯に露呈してゐる。われわれはこの事實の歷史的由來を檢討しなければならぬ。

歷史にさかのぼれば日本國家主義と支那民族主義は、西歐の民族主義が近代資本主義の發展の中に發生したものであるに反して、西歐の帝國主義の接觸を媒介として發生したものであることにおいて全く同一地盤を有してゐたといへる。それにもかかはらず、その後の日本國家主義と支那民族主義は相互に各々別の道を辿り、遂に今日のごとき悲しむべき相剋鬪爭を招來したのである。日本國家主義と支那民族主義がもたらしたこの悲劇的對立の歷史過程の中には、もちろん、すでに本質的に相違する幾多の條件の存在することを否定するものではない。しかしながら果して日本國家主義と支那民族主義は永遠に氷炭相容れざるごときものであつたかといへば、私は斷じてさうは思はない。只不幸にも兩國の識者がそれを認識しなかつたか、認識してもこれを指導しなかつただけである。

日本國家主義と支那民族主義の協同、これは今日東亞民族の切實な叫びである。しかしながらこれら二つの民族主義が眞に協同される爲には、まづ二つの民族主義の歷史的實體が誤りなく認識されなければならぬ。そして眞に過去及び現在において協同できる地盤と根據が示されなければならぬ。若しかかる地盤と根據を明かに認識せずして、かくの如き協同を口にするならば畢竟口頭禪に終るであらう。

## 二　支那民族主義の發生

孫文は三民主義の中において支那民族主義を次の樣に説明してゐる。「民族主義とは如何なることかといへば、中國の歴史上における社會習慣等の狀態を按じて、私は只一句を以て簡單に言ひ得る。卽ち民族主義とは國族主義のことである。中國人は、家族主義と宗族主義を崇拜するのみで、國族主義といふものが無かつた。或る外國人はこれを觀て、中國人は恰も撒いた砂のやうなものである、といつた。これは一般人民に家族主義と宗族主義があるだけで、國族主義がないためである。中國人は家族に對する團結力が非常に强大であつて、往々宗族を保護するためには、身も家も生命までも犧牲とすることを厭はない。この主義が斯の如く深く人心に注入されてゐながら、國家に對してはこの犧牲的精神を缺如し、中國人の團結力は宗族に止まつて國族にまで擴大されてゐないのである。」

確に孫文の指摘せるがごとく支那思想史の中には近代的民族主義思想を發見することはできない。それ故に支那思想一般は儒教を含めて近代的民族主義以前の思想であつたと見ることができる。そして同時に西歐の民族主義が近代資本主義社會の發生によつて生れた歴史的産物であつたと同樣に、支那民族主義もまた近々一世紀の間に發生發展したところの、近代的歴史的産物であるといふことができるのである。だが上述のごとく支那において近代民族主義が存在しなかつた最大の原因は、支那民族が形成した歴史上の各王朝は近代的な國家を成立しなかつたといふことによるものである。

神川彦松教授は中華帝國（支那歴代諸國家）を世界史上に於ける三大帝國であると指摘し、古代ローマ帝國及び大英帝國と對照しつつ甚だ有益な研究を發表されてゐる（中華帝國の本質、野村教授還暦祝賀公法政治論集）。

卽ち教授は中華帝國（支那歴代諸國家）の本質を結局農牧的・文化民族主義的・王道的世界帝國であつて近代的帝國の有する民族主義的・資本主義的・武力主義的特質を一も具備せざる中世的帝國である、と論ぜられ、そして「斯かる時代を超越せる特異なる世界帝國も歐米の近代的民族及び近代的帝國と接觸せずその侵略を受けざる間は尙ほ生存を維持するを得たのである。然し近代生存鬪爭の激烈なる國際社會に於ては民族主義的、資本主義的及び武力主義的政策を實行する國家に非ざれば到底自主獨立を全うし膨脹發展を遂げ得ざる事は近代世界史の實證する所である。中世的帝國たる中華帝國が斯くの如き近代國家又は近代帝國と生存鬪爭を爲す時、到底敗北を免かれざるべからざるべきは當然であると言はねばならぬ。十七八世紀に於て世界最大の帝國であり

文化の燦然たる富力の偉大なる世界に冠絶してゐた中華帝國が僅々一世紀の經過の間に遂に土崩瓦解を免かれなかつたのは必然の運命と言はねばならぬ」と述べて居られる。

確に神川教授の論ぜられるごとく、支那におけるあらゆる歴史の發展が封建的中世的段階に停滯してゐた、といふことは最近の歴史家が無數の史實を分析した結果到達せる最後の結論である。そして同時に支那が十八世紀後半より西歐帝國主義諸國の軍事的・政治的・經濟的侵略によつて崩壞しはじめたことも又事實である。しかしながら支那がすでにその時にいはゆる農牧的・文化民族主義的・王道的世界帝國より民族主義的・資本主義的・武力主義的特質を有する近代的民族國家への第一歩を踏み出し、而して又支那民族主義の發生も實はここに胚胎してゐることを忽視してはならない。

ここにおいて私は神川教授の「清帝國の瓦解の後を繼ぎ、その遺産をその儘繼承するに至つた中華民國はその表面の形態如何に拘らず舊態依然たる中華帝國に他ならぬのである。中華民國の建設者達は中華民國を以て近代的民族國家をなす事を標榜してゐるけれども然しその政策目的が中華帝國の維持保存にあることは明白疑を容れざる所である」といふ論説は完全に誤謬であることを指摘せざるを得ない。

周知のごとく十九世紀以來一世紀にわたつて支那は西歐帝國主義諸國の軍事的・政治的・經濟的侵略によつていはゆる半植民地化された。それ故に今日なほ支那は近代的民族國家を完成することはできなかつた。だがそれにもかかはらず支那が完全なる植民地と化せず、近代的國家建設に向ひつつあつたことは多くの人によつて指摘されてゐる。われわれはこの支那の特殊的性格をはつきり把握し、又この特殊的性格の中に發生し、生長しつつあつた支那民族主義の性格を歴史的・社會的に認識しなければならない。

## 三　自由主義と反封建主義

最初の支那民族主義が自由主義として現はれたといふことは、全く支那の歴史的社會的事情に基くものである。周知のごとく阿片戰爭は支那三千年來の封建的壁壘を破壞し、支那の鎖國主義的自給自足の封建的農業經濟を本質的に崩壞せしめたのである。かくの如き社會經濟上の轉換に當つてとるべき道は二つしかない。卽ち一つは支那をして資本主義侵略の完全なる世界市場たらしめるか、或は資本主義を驅逐して自國の資本主義を育成しこれと對抗せしむる、この二つの道しかない。支那民族運動の淵源と稱せられてゐる太平天國運動はいかなる性格をもつて現はれた

であらうか。

いはゆる民族主義者によつて理解されてゐる太平天國運動における民族主義の意義は、主として支那が歴代二千年の間くりかへした過去のいはゆる天下を爭つて江山を奪ふといふ戰爭戲ではなく、不倶戴天の滿洲朝廷を顚覆せんとする濃厚なる政治的民族的感情に色彩づけられてゐる事實によるものとされてゐる。太平天國の首領洪秀全が、後世の史家から民族の英雄、または革命の先烈と稱せられる所以もまた實にここにある。だが上述の根據は支那民族主義の最初の出現としての太平天國運動の性質を充分說明するものではない。

太平天國運動にはすでに滿洲朝廷に對する漢民族の民族的感情のあらはれてゐることを否定するものではないが、太平天國の本質は消極的な民族的感情といふよりむしろ積極的にキリスト敎的な自由主義理念によつて近代國家を建設せんとする企圖に外ならなかつた。それ故に具體的には天朝田畝制度といふ徹底した土地公有に基く社會組織の革新やその他各種の社會政策をもつことができたのである。

太平天國運動に刺戟された自由主義精神は、洋務運動にその最も顯著な行動として現はれた。洋務運動は主として清朝の官吏によつて、それ故に又清朝を肯定することを前提として、資本主義の技術的追求のみに向けられたといふことに特徴を有してゐる。彼等は支那が世界における獨立の國家として生存して行く爲めには、まづ西洋文明を採用攝取しなければならぬと考へた。だが彼等の考へた西洋文明は資本主義の技術であつた。それ故に彼等には封建的社會體制を打破して、新社會を建設しなければならぬといふ思想、民主主義もなく、只技術的追求のみがあつたのである。

然るに初期の民族運動が社會的變化に伴つて、廣東を策源地とする海外の華僑を中心とする全く別の方向より發生しはじめた。一八九二年の興中會の成立はすなはち、その最も具體的表現である。周知のごとく興中會は辛亥革命の指導者孫文によつて組織され、後の同盟會の前身であるが、當時においてはいまだ明確なイデオロギーを持たず、從つて又滿洲朝廷に對する反抗的意識を持たざるのみならず、むしろ滿腔の熱意をもつて清朝政府がよく力めて自强を圖り、支那の光輝を恢復することを希望したのである。そして又帝國主義には反對せず、支那もまた帝國主義と「並駕齊驅」せんことを希望したのである。

要するに彼等の民族運動も、僅かに一種の「力めて自强を圖る」運動にすぎなかつたことは彼等の指導機關の宣言や綱領に見出すことができる。

しかしながらこの事實は當時の民族主義者であつた進步的な知識階級や華僑ブルジョアが一方

においては帝國主義の經濟的侵略と環境の壓迫の爲め、目前の政治に對して不滿を表示し乍ら、他方においては舊時代の制度に戀々として、徹底的に現制度を覆へす決心がつかなかつたからである。彼等の斯樣な矛盾した心理は清朝政府がよく自力で維持改良し、國家數千年の歷史的光榮を恢復すれば、支那の民族的發展は完全に達成されるといふ考へに支配されてゐたからである。

康有爲等の戊戌の維新運動（一八九八）はかかる性質をもつとも遺憾なく發揮してゐるものである。この運動の中心人物康有爲は、帝國主義の侵略に對してはもつともこれを惡んでゐた。然しながら、帝國主義侵略下の支那を救ふ道はただ日本の明治維新の道を模倣して、諸制の改革をすることによつてのみ帝國主義列强の羈絆から脫出することができる、と考へた。

しかるに、かくのごとき民主的制度改革の理論さへ清朝政權は受容することができなかつたのである。ここにこれより後の民族運動が一面に於て民主革命のスローガンをかかげると同時に、一方において民主的精神を拒否する封建勢力を徹底的に打倒する方向に行かざるを得なかつたもつとも大きな契機が含まれてゐるのである。かかる意味において初期民族運動史上における維新運動の思想史的意義は極めて重大である。

維新運動について起つた反帝國主義運動の萠芽としての義和團事變が、後に反封建的方向——言葉を換へて云ふならば清朝政權に對する反抗運動としての性質を帶びるにいたつたことは、根本的には社會經濟的乃至政治的意義を見逃す譯には行かないが、思想史的に見れば反封建的思想が次第に廣く、且つ深く浸潤するに至つた爲めである。そしてかかる思想的趨勢の決定的な契機を爲したのが同盟會である。

初期の民族運動がすでに資本主義的精神に出發し、同時にかかる立場において民主精神と對立する封建思想に反對し、更に又封建思想の政治的勢力としての清朝政府に對して多かれ少かれ不平と不滿を抱いてゐたことは事實である。しかしながら多くの場合この不平と不滿はむしろ清朝政府を改造改革することによつてその目的を達することができ、又かくすることが彼等のもつとも健全なる方法であると考へられたことは、かれらの具體的行動がこれを實證してゐる。

たとへば李鴻章の洋務運動・興中會の政治的要求・維新運動の政制改革論等は、皆その實例である。しかるにかくの如き改變要求は清朝政府の受容れるところとならなかつたこと、そして又一方においてその後の社會的變化は、かくの如き不徹底な態度や方法をすでに思想的にも又政治的にも全く許容することができなくなつたのである。近代國家建設を目標として、同時にその目標をば清朝政府を擁護することによつて達成せんとした上述のいろいろの民族運動が、一路清朝

政府打倒へと轉換したのはかくのごとき歴史的事情に基くものである。

同盟會が公然と「前代は英雄革命であるが、今日は國民革命である」と宣言して民主革命を明確なイデオロギーとして、國民政府建設の目標の下に清朝政府顚覆のために全力を集中したといふことは右の事實を實證してゐる。

それ故に同盟會は第一に民權思想、第二に人民の生活に重點をおいてゐる。この二つの點は非常に重要なことであつて、これらの民主革命の精神が興中會の宣言に見られずして、同盟會の宣言に見られるといふことは、これを思想史的に見れば、單に孫文や彼等革命黨の知識的進歩によつて決定されるものではなく、社會經濟機構の發展と共に封建主義思想が次第に崩壞して、民主主義的段階に到達しつつあつた、と見ることができる。而して孫文等の革命思想及び革命行動がこの思想史的段階に適應したものであることはいふまでもない。辛亥革命の成功と民國の成立は全く上述のごとき思想史的潮流の一つの段階を示すものである。

## 四　社會主義と反帝國主義

初期民族主義者の近代的民族國家建設の目標、もつと具體的に言ふならば太平天國の社會經濟政策、洋務運動の資本主義の技術的追求、維新運動の政制改革、同盟會の民權主義確立等々――は世界史的な立場において何れも必然的方向であつたと見ることができる。しかしながらこれら民族主義者の目標と行動は現實の歴史の中にあつては何れも失敗の繼續であつたことは、近代支那史がもつとも確實にわれわれに教へて呉れる事實である。

民族革命運動史上において最も特筆すべき一九一一年の民國革命すら、彼等民族主義者が企圖した民主主義の完全な成功を確保するものでなかつたことは、その後の歴史が示してゐる。

斯の如く初期民族主義者の目標が現實の歴史の中に於て何故にしかく實現され得なかつたか、之は今日支那民族主義者の課題であるが、同時にわれわれが支那の實體を認識するもつとも重大な鍵である。

だが事實として彼等民族主義は彼等の企圖する目標の實現がいかに容易ならぬ困難を伴ふかをしみじみ感ずると同時に、單純に彼等が追求してきた近代民族國家そのものの本質に對して、一つの疑惑を感ぜざるを得なかつたのである。

その疑惑の第一は資本主義であり、第二は帝國主義である。この樣な疑惑が一方において西歐の資本主義に對する批判として發生したところの社會主義に媒介されたことは云ふまでもない。

だがそれは單に思想として媒介されたのみでなく、國際的、國內的な支那の現實がいかに强く資本主義竝に帝國主義に對する嚴しい批判を要請してゐたか、といふ現實の事態を忽視してはならない。若し單に社會主義思想の媒介といふ一面のみを見るならば、日本は支那よりはるかに廣く、同時に深く社會主義思想の媒介を受けてゐる。しかるに日本國家主義が社會主義思想より受けた影響は支那民族主義と全く逆な現象を生ぜしめてゐる事實に想到するならば、かくの如き現象は全く支那の現實的社會諸條件によつて規定されてゐることを、深く理解することが出來るであらう。

孫文の三民主義はこの事實をもつとも端的に表現してゐる。

卽ちその民生主義は資本主義的發展によつて動機されたが、資本主義批判の精神によつて生れたものであり、その民族主義は近代民族國家の行動に刺戟されて發生したのであるが、しかも近代民族國家の行動を批判する精神によつてより强く支配された植民地解放の要求である、と見ることができる。

しかもこの資本主義批判の民生主義と植民解放民族主義は、民族國家統一の最初の要求として現はれた民權主義と三位一體を爲してゐるのである。

孫文は彼自身の「民生主義」を「民生主義は卽ち社會主義で、又の名を共產主義と言ひ、卽ち大同主義である」（民生主義第一講）と言つてゐるが、マルキスト朱其華は孫文の思想を次の如く評價してゐる。

「或人は言ふ、『孫中山先生の全部の思想、とりわけ彼の民生主義は、全く社會主義的である』と。これは只かかる言ひ方をする人の愚さを表現するに過ぎない。

一九二七年以前、卽ち國共兩黨合作當時には幼稚な共產黨員の中には中山先生の民生主義を一種の『社會主義』甚だしきは『共產主義』だと解釋しようとしたが、これは誠に恥づべき妄圖であつた」と。

そして彼は民生主義は畢竟勞働者が資本家の爲めに生產を增加する社會制度を目標とするものであるから、資本主義思想に外ならぬと結論してゐる。かくのごとく民生主義が一方において社會主義と理解されてゐるにもかかはらず、他方には資本主義思想と解釋するものの存在することは一見はなはだ矛盾する樣に思はれる。

しかしかくのごとき矛盾は孫文の環境が一方に於て資本主義社會を羨望してゐるにもかかはらず、他方では資本主義社會を實現することの困難さと資本主義批判の思想の媒介によつて共產主義・大同主義を不可避的な社會であることに想到せしむるにいたつた爲めである。

かくの如き矛盾した思想は民族主義の中にも現はれてゐる。卽ち孫文は日本が白色人種以外の有色人種でありながら、明治維新後西歐の文物を取れることによつて强國となつたことを以て、同じく黃色人種たるアジア人の心に希望を點じたものとして喜びながら（民族主義第一講）その後愈々强盛に向ひつつある東隣の新興國に對して少からぬ脅威を感じ、最も近い處に在つて支那を亡し得るものは日本であるとなし、アジア大陸の黃色人は現在日本人の壓迫を受け、久しからずして或は消滅するかも知れぬと危惧してゐる（民族主義第四講）。

しかるにソ聯に對しては、「革命によつてソ聯が帝國主義國家から社會主義國家に轉向し、白色人の侵略行爲に加擔せず、公道を支持して現にアジアの弱小民族に加勢し、强暴民族に反抗してゐる」（民族主義第一、第三講）と說いてゐるところを見れば、孫文がいかに困難なる環境の中にあつて矛盾せる思想の苦悶を抱いてゐたか、を知ることができるであらう。そして同時に彼の民生主義が共產主義に轉化し、民族主義が反帝國主義排日抗日へと轉化した思想史的意義を理解することができるであらう。

## 五　全體主義と抗日主義

國民黨及び共產黨の合作によつて强化された社會主義並に反帝國主義民族運動は一方においては一般大衆を民族運動に參加せしめたことに於て、又他の一方には帝國主義及び封建勢力の遠心的勢力を求心的方向に導くことを得しめた點において、民族運動史上偉大な役割を果したと見ることができる。

しかるに他の一面において日本に對する民族的憎惡と怨恨と敵愾心を極度に刺戟し、助長し、他方漢民族の民族的弱點短所をカモフラージして我田引水的自己陶醉的大言壯語を連發した結果として、全支各地に露骨な排日的言動が間斷なく出現したのである。これに對して國民政府が日本よりその度每に嚴重な抗議を受けざるを得なかつたのは當然である。そして若し民衆の意嚮に從ひ排日に拍車をかけるならば日本との正面衝突は不可避的な情勢にまでたちいたつたのである。國民政府が日本と正面衝突をすれば國民政府は瓦解し、國內は深刻なる內亂の巷と化し、支那經濟は破滅し、列强の再分割的進出が愈々企圖されるだらうとすることは容易に想像されることである。いかなる國民政府といへどもかくの如き冒險を敢へて企圖し得なかつたのは當然である。しかし若し日本との衝突を避けんとすれば從來の社會主義並に反帝國主義（排日運動）民族運動は放棄しなければならなかつた。

ここにおいて汪兆銘のいはゆる「一面抵抗、一面交渉」の政策を再檢討し、先づ廣義國力の充實を圖ることによつて抗日の實果を收めんとする態度が顯著となつた。「日貨排斥」が「國貨提唱」となり、「排日教育」が「國史教育」となり、對日戰備が「民族復興自主獨立のための國防充實」に塗りかへられたのもこの期間である。そして具體的にはこれが蔣介石のいはゆる「先づ內を安んじ、然る後外を攘ふ」（先安內攘外政策）といふ言葉に表現された國民黨民族運動の根本方針となつたのである。

さて一方、一九二七年蔣介石の南京政府と分裂した共產黨は南京政府を對象として、共產軍の結成、支那ソヴェート區の建設擴張等に邁進し、一時民族運動に對し積極的な活動を示さず、從つて國民政府のいはゆる民族復興の建設的民族主義に壓倒された姿勢をとつてゐた。

しかるに一九三五年七月二十五日より八月二十日にかけてモスコーに開かれた第七回コミンテルン世界大會を契機として、同八月一日中國共產黨中央執行委員會及び中華ソヴェート政府人民委員會連名の下に發表された「抗日救國のために全國同胞に告ぐ」といふ宣言は中國共產黨の政策に劃期的な一大轉換をもたらしたのみならず、支那民族運動の上に又重大な影響を及ぼした。

此宣言の內容をここに解說することは許されないが、此宣言のもつ歷史的意義は看過してはならない。

この宣言は一般的革命戰術としての階級的反帝國主義運動を清算して、目標を日本帝國主義のみに限定し、その目標の爲には中國國民黨その他國內勢力のみならず、歐米帝國主義を利用せんとする抗日民族主義に轉換したことである。

この事實はいはゆる抗日救國のスローガンが實質的に全支那のあらゆる階級に漸次浸潤し、救國會を樞軸とする全國的な抗日人民戰線の組織が結成されたといふことが實證してゐる。かくの如く抗日救國の人民戰線派の思想が、國民黨「先安內後攘外」の民族復興の思想をまたたく間に席卷して全支那の一大思想的勢力となつた事實の客觀的原因については、もちろん多くの人々によつて分析されてゐるが、かくの如き社會的基礎を充分解明することは今日なほ一つの大課題である。それは充分世界史的な立場においても、ことに日支の關係において、又支那の社會及び思想の上から徹底的に研究することが必要であるやうに思はれるが、ここでは、それ以上觸れることはできない。

以上の素描によつて知られるごとく、一九二七年の國共分裂以後における支那民族主義は一方には國民黨の民族復興の建設主義があり、他方には共產黨の抗日人民戰線があつて、互に民族運

動の支配的潮流となつてゐたが、西安事變は遂に、この二つの民族主義が合體する契機となつた。即ち支那民族主義の全體主義的潮流はこの時に始まるものである。しかもこの全體主義抗日主義が遂に支那事變を發生せしめるにいたつたのである。

（昭和十五年五月『外交時報』所載）

# 孫文主義の儒教的基礎

## 一　はしがき

東亞新秩序建設の指導原理が國策の俎上に上り、東亞の思想運動が眞劍に檢討されるにいたつたことは、當然なこととといひながら、喜ぶべきことである。事變はすでに第五年を迎へたにもかかはらず、なほその根本的解決は前途遼遠の感を深くせざるを得ない現實に、我々は曇りないメスを入れなければならぬ。事變の本質は一部の人々が指摘してゐるごとき決して一時的、局部的な現象に基くものではなく、究極的には近くは一百年に亙る世界史的現實の中に培はれた支那民族の世界觀と日本民族の傳統的世界觀の抗爭にあるのである。事變處理の究極的方法は實にこの世界觀の問題の解決にあるのである。從つてこの日支民族の世界觀の根本的解決を圖らざる限り、いかなる武力的解決も、政治的解決も眞の永久的解決ではない。このことを我々は徹底的に探究せねばならぬ。現代の戰爭は國家總力戰といはれてゐるが、それは現代の戰爭が究極的には民族

國家間の世界觀的鬪爭であるからである。國家總力戰である支那事變の現實も益々この世界觀的鬪爭にあることを明瞭に示してゐる。この意味において、思想運動や思想戰を單なる武力戰や政治的鬪爭の補助的方法であるかの如く考へる從來の戰爭觀は、この際徹底的に認識を新にせねばならぬ。すでに日本朝野の認識は漸次事變の世界觀的、思想的意義を深めつつある。東亞の思想運動が政府によつて檢討され始めたことはこの意味において重要な意義をもつてゐる。

だが我々がこの際特に反省しなければならぬことは世界觀的問題の解決を、決して簡單に考へてはならないといふことである。一國の思想や世界觀はただ一篇の官選的文章や論文によつて左右されるやうな單純なものではない。このことだけは充分考へて誤らないやうにしたい。なるほど東亞の思想運動は正に緊急の課題であるが、それゆえにこの運動が輕々に扱はれてはならない。我々はこの運動を積極的に推進する方法を眞劍に考へると同時に、東亞民族の歷史的本質を研究し、支那民族の世界觀を探究し、更にこれを積極的に指導し得る用意を忘れてはならない。私は東亞の思想問題を展望しながら、しみじみこのことを深く感ぜざるを得ないのである。

私が憂ふるまでもなく、事變以來日本の一部にはことに支那民族の世界觀たる三民主義や孫文主義に對する關心は昂まり、これに對する幾多の飜譯研究も出てゐることは事實であるが、なほその根本的研究や批判は殆んど見ないといつても過言ではないやうに思ふ。かやうな現狀を以てしては到底我が國民を納得せしめ、支那の知識階級を思想的に指導することは思ひもよらないことである。私がいふまでもなく、東亞の思想問題の中心的課題は孫文主義の批判と日本主義原理の探究である。この課題はあらゆる角度から探究されなければならぬが、私のこの小論に對する意圖は上述の一つの意味に外ならない。

ところで私がこの小論において企てんとする目的は、儒教主義の意義とその孫文主義との關係を明かにせんとしたものである。この問題は現代支那思想の中心課題であるばかりではなく、今日もつとも明かに認識されなければならぬ根本的問題であるやうに思ふ。この意味において私は率直に所見を述べて識者の批判を仰ぎたいと思ふ次第である。

## 二　儒教主義の本質

この短かい小文で儒教主義の本質をあますことなく解明することは、もちろん不可能なことである。だが古來無數の內外の學者によつて論ぜられて來た儒教觀の多くは、儒教主義の立場に立つて、儒教主義のすぐれた特質を祖述したり、闡明したのみであつて、儒教主義の本質はいまだ

充分闡明されてゐるとはいへない。殊に日本の儒學者や漢學者の儒教觀は、日本的觀點のみから考察されてゐるために、日本儒教との異同を來し、支那における儒教の本質が客觀的に理解されてゐない憾みが多い。日本における儒教觀のかやうな錯覺は、儒教を正しく理解する上に大きな遮害を爲すもので、この錯覺を拂拭しない限り、儒教主義の本質は正しく認識することはできない。

以上の意味において、私は從來の學者によつて比較的論ぜられなかつた儒教主義の缺陷を探究して、これによつて儒教主義の本質をより正しく認識したいと思ふ。

孔子の說いた儒教はその後の歷史的發展によつて多少の變化はあつたが、本質的には殆んど變化することなく、漢代より清朝まで大體支配的思想として生命を保つて來た。ところでこの儒教主義の歷史的發展を支那民族の歷史的發展と關聯して、我々が儒教主義の特質として指摘できるのは次の諸點である。

第一は家族主義である。儒教主義が家族主義の基礎に立つてゐることは周知の事實であるが、注目すべきことは、儒教主義の家族主義は近世に至るまで終始一貫して變化してゐないことである。西洋においては、個人主義から社會主義へ、或は個人主義から民族主義へと發展し、日本においては家族主義から日本主義（國家主義）へと發展してゐるにもかかはらず、支那においてはこの家族主義は遂に近代にいたるまで發展することがなかつた。これが支那民族の近代的發展への致命的缺陷であつたのである。孫文が三民主義の中で支那には家族主義、宗族主義はあるが、國族主義はないことを指摘して民族主義を鼓吹してゐるのは儒教主義のこの缺陷を指摘したものである。要するに儒教主義は家族主義であつて、民族主義や國家主義ではない。

第二は專制主義である。儒教主義はこれを政治的に見れば君主政治であるが、獨裁的、專制的である。そしてこれは一般には王道といふ言葉で表現され日本の皇道としばしば混同されてゐるが、王道と皇道とは決して同一ではない。私はここで王道論や皇道論をくり擴げる紙面をもたないが、王道の特質は一般民衆や國民と結びつかない君主と一部の特權支配階級によつて行ふ專制的政治である。儒教主義は民本主義であるといふことはよくいはれるところであるが、儒教主義の民本主義は獨裁政治の方法として民衆的立場すなはち民心が顧慮されるといふ意味であつて、西洋の民主主義や日本の君民一體といふ翼賛主義とは完全に異るものである。只西洋的の獨裁政治や專制政治と異るところは、政治の方法を道德に求めるといふところにあるのみである。儒教主義が治者道德といはれ、知識社會の道德であるといはれるのはこの意味である。從つて儒教主義は國民大衆と殆んど關係もなく、知識社會においてのみ發展し、又維持されて來たのである。

儒教が近代にいたるまで一部の支配階級の獨占的學問であつたことに何の不思議もない。孫文の民權主義が近代支那の支配的思想となつたのは、もちろん世界史的意義もあるが、一面には儒教主義の專制的政治に對する思想史的意義があるのである。

第三は自然主義である。支那思想のみについていへば、儒教はかならずしも自然主義的傾向が強いとはいへない。しかしこれを西洋思想に對比して見れば、いかに自然主義的色彩が濃厚であるかを理解することができるであらう。一般に自然主義は東洋思想の特色であるが、東洋の自然主義は人間が自然に則ることである。人間が自然に融合し、一致することであるから、自然を開拓し、自然を攝取するといふ態度がない。むしろ自然に反抗する意欲はなるべくおさへ、いかに自然に順應するかといふことのみに腐心したのである。從つてさういふ生活の中から科學的精神は生れる筈がないのである。唯物史觀の立場からアジアの停滯性が東洋の特色であるといはれてゐるが、東洋の停滯性は一面からいへば東洋の自然主義に胚胎するものであると見られる。東洋の自然主義はすでに述べたごとく、儒教主義にのみ見られる特色でないことはいふまでもないことであるが、儒教主義もまた自然主義的特色をもつてゐることは認識されなければならぬ。そしてこの自然主義的特色が、同時に儒教主義の大きな弱點であるといふことも明確にされなければならぬ。孫文が三民主義において說いてゐる民生主義は人間生活の物質的面を强調しすぎてゐるきらひがあるが、これは儒教主義の自然主義的缺陷を補正するものとして重要な思想史的意義をもつものであると思ふ。

## 三　儒教主義と歷史的支那の性格

戴季陶は「孫文主義の哲學的基礎」で支那民族と老子の思想との關係を次の如く論じてゐる。

「中國國家勢力の發展並びに民族文化の進步を阻害したのは決して民生の發達を目的と爲し智仁勇を以て道德の基礎となせる社會連帶責任主義者たる孔子の政治思想ではなく、極端なる放任を以て手段となし極端なる專制を目的と爲した老子の個人主義的政治思想である。なほ且われ等は孔子の政治思想はかれの獨創ではなく、ただ單に堯舜このかた文・武・周公に至れる建國の經綸を學術的方法によつて整理しそれに一個の倫理哲學の性質を付與したに止まることを理解しなければならぬ。この一個の思想は正に、孫先生の說くところに從へば『極めて精微に展開された理論』である。三代千有餘年の間中國の文化が世界文化史上最も價値ある文化となれる所以は、完全にこの一理論に支配されて發展したところにある。もし中國が漢代以後衰微したのは孔子の思想にその罪があると說くものありとせば、それは歷史の事實を完全に抹殺し

た盲論である。」

戴季陶に限らず、一般に儒教主義者は儒教主義を理想化するために、儒教主義と歴史的支那民族を分離して抽象的に考へる傾向がある。つまり儒教主義は萬古不易の絶對的眞理であるが、歴史的支那民族が發展することができなかつたのは儒教主義以外の思想のためであつた。歴史的支那民族が實踐する力がなかつたのである、とする考へ方である。支那にも、又我國にもかやうな儒教主義者は少くないが、かやうな考へ方は要するに儒教主義にとらはれた見解であつて、儒教主義の正しい理解ではない。もちろん私は、戴季陶の論じてゐるやうに、老子の思想――すなはち老莊の思想や老子に淵源する道教が支那民族停滯の一つの原因を爲してゐるといふ見解を悉く否定するものではない。しかし支那民族停滯の原因は悉く老子の思想であつて、儒教はこれに何ら關るところはないといふ見解には到底贊成することはできない。

もし老莊の自然主義、虚無主義、宿命主義が支那民族の停滯と關係があるならば、儒教主義はより深い關係がなければならぬ。何故ならば儒教主義は老莊思想よりはるかに深く支那民族の發展と關係があるからである。この意味において支那民族の歴史的發展と儒教主義とを分離して考へる戴季陶等の考へは、我國の儒教主義者と同樣に完全に誤謬である。もし歴史的支那民族に若干の長所があるならば、この歴史的支那民族が生み出して發展せしめた儒教主義にも長所がある筈である。又歴史的支那民族に弱點があるならば、それは同時に儒教主義の弱點でもある。この意味において儒教主義を歴史的支那民族と分離して概念的に解釋することは、要するに机上の空論に過ぎない。私は必ずしも儒教主義と歴史的支那民族の性格とは全く同一のものであると主張してゐるのではないが、儒教主義と歴史的支那民族を意識的に、又無意識的に引離して考へる見解に對して充分檢討する必要のあることを認めるのである。

以上の觀點に立つて歴史的支那民族の性格を考察すると、次の諸點にその特質を觀ることができる。

一、思想的には道德的特色をもつてゐる。

二、政治的には獨裁的、專制的である。

三、社會的には家族主義的である。

四、經濟的には自然主義的色彩が強い。

歴史的支那民族の性格は支那の自然的、社會的、民族的な複雜な條件によつて形成されたのであるが、一面において儒教主義が上述のやうな、歴史的支那民族の性格を持續せしめる大きな役

割を果して來たものであることも疑ふことの出來ない事實である。もし歴史的支那民族の性格とその發展に儒教主義が何ら係るところがなかつたとするならば、近代に至るまで儒教主義が支配的思想としてその地位を持續して來たといふことは殆んど理解することができないのである。かやうな意味において私が結論的に理解することのできることは次の二つのことである。

第一、いはゆる儒教主義は支那の自然的、社會的、民族的條件卽ち歴史的支那民族の中から發生し發展したものであるといふこと。

第二、いはゆる儒教主義は同時に支那の自然的、社會的、民族的條件卽ち歴史的支那民族の發展に重要な影響力をもつてゐるといふことである。

以上の事實を認識するならば、支那民族には種々の缺陷があるが、儒教は永久不變の絶對的道德であるといふやうな議論がいかに抽象的な概念に過ぎないといふことを理解することができる。同時に儒教主義が東洋道德の典型としてすぐれた特色をもつてゐるとすれば、それはとりも直さず、支那民族がさういふ東洋的性格をもつてゐるといふことを明瞭に肯定されなければならない。

## 四　孫文主義の本質

最近我國では三民主義に對する關心は稍高まりつつあるが、なほ孫文主義に對する綜合的認識は充分であるとはいへない憾みがある。これは三民主義を認識する上からのみ觀ても甚だ遺憾なことである。三民主義は孫文主義の中心思想であるといふことは事實であるが、孫文主義の全部ではない。このことは正しく認識する必要がある。三民主義はただ三民主義を理解するのみではなく、孫文主義全思想體系を理解することによつてはじめて正しく認識されるといふことを、もう少し明確に理解する必要がある。

ところで孫文主義はいかなる特質をもつてゐるかの問題を論ずる前に、孫文主義の中心思想である三民主義を檢討して見たい。この三民主義は現代の支那思想においてもつとも重要な問題で、支那においてはすでに多くの研究がある。私はこれらの見解を悉くここに紹介することはできないが、その代表的見解の二三を批判しつつ私の所見を述べようと思ふ。

まづ第一に檢討すべき問題は三民主義の不可分性と統一に關する戴季陶と周佛海の理論である。戴季陶と周佛海のこの問題に對する見解には多少の相違はあるが共通せる觀點は次の二點である。

第一は三民主義における三つの問題――民族、民權、民生は全體として三民主義の不可分の部分であるといふこと。

第二は三民主義の中心的なもの、又は支配的なものは民生問題であるといふこと。

以上の觀點に立つて戴季陶は民生哲學を說き、周佛海は民生史觀を說いてゐるのである。

戴季陶の民生哲學及び周佛海の民生史觀はこれを發生的に見れば、國民革命時代の社會主義的思想の背景から生れたものであるが、その後陳立夫の唯生論の發展となり、今日においてもなほ一面有力に支持されてゐる孫文主義の解釋である。だが戴季陶及び周佛海の見解に對して我々は積極的に檢討する必要がある。

第一に三民主義の三つの問題——民族、民權、民生は不可分であるといふ解釋は果していかなる意味をもつか、三民主義はもちろん三民主義として統一した主張をもつてゐることは明かであつて、三民主義の不可分性は充分認められなければならない。しかし不可分性といふことは要するに論理的概念的解釋であつて、かやうな論理的解釋のみによつて、この三民主義を正しく理解することはできない。すべての思想は元來すべて具體的な生きた社會的地盤の中から生れるものである。從つてすべての思想を解釋するには具體的な社會的地盤を考へなければならぬ。

ここにおいて、我々がまづ考へなければならぬのは三民主義の歷史的意義、すなはち三民主義の歷史觀である。もちろん三民主義は特に歷史觀と稱すべき言葉をもつてゐないが、孫文が民族主義に出發し、三民主義の最初に民族主義を掲げたことは何といつても大きな意義がある。三民主義のもつとも大きな特色はここにある。近代における民族主義は世界史の方向であつて、かならずしも孫文の獨創でないことはいふまでもないことであるが、近代にいたるまでいはゆる家族主義的段階に止まり、近代的意味の民族的統一の行はれなかつた支那に民族的目標を與へた孫文の功績は何といつても特筆すべきことである。その後孫文の民族主義は、蔣介石によつて國家主義に發展し、抗日主義に轉化して支那事變の原因を構成するにいたつたが、民族主義の歷史的意義は正しく理解されなければならぬ。次に注目すべきは孫文晩年の思想であるところの大アジア主義である。この大アジア主義の思想的內容については、別の機會に論ずる積りであるが、私の考へるところによれば大アジア主義は民族主義の發展である。民族主義は事變によつて、愈々その歷史的意義を明瞭にしつつあるが、孫文が晩年において大アジア主義を唱へたといふことは、民族主義の發展としてその歷史的意義は大いに檢討さるべきである。

第二は三民主義の中心課題を民生にありとする周佛海や戴季陶の解釋は孫文主義の正しい解釋であるだらうか。私の考へによれば、民生主義は要するに孫文の社會觀であると思ふ。ところがこの民生主義はすでに明かにされてゐる如く、孫文が遂に完成させるに至らなかつた思想である。

從つて又民生主義の內容及び解釋は必ずしも一定せず單に解釋が異るのみでなく、孫文自からのいふところも決定的なものはなく、又明瞭な思想的根據がある譯ではない。彼自から民生主義は社會主義であり、共產主義であり、大同主義であるともいつてゐるのはその明證である。かやうな思想のあいまいさが、民生主義を社會主義にし、共產主義にし、或は儒敎主義に解釋せしむるのであるが、これは必ずしも孫文主義の本質ではなくして、思想の未熟なるところから來る解釋の相違ではないかと思ふ。たしかに孫文の說いた限りの民生主義には社會主義的な、共產主義的な、大同主義的面をもつてゐたことは事實であるが、民生主義の本質はやはり傳統的な思想である大同の思想を根柢とした一種の社會主義であるやうに思ふ。從つてそれ故に物質的面が强調されてゐることも事實である。しかしそれは大同主義を根柢とする限りにおいて、單なる西洋的物質的な社會主義と根本的に相違するものである。同時に又傳統的な道德主義的大同主義とも同一でないことも事實である。從つて民生主義は傳統的な道德主義的大同主義を根據とする西洋的な物質主義的社會主義である。この點をもう少し檢討する必要がある。

## 五　孫文主義と現代支那

以上述べたごとく、孫文主義には種々の思想的要素が含まれてゐるが、我々がもつとも根本的に認識しなければならぬことは、孫文主義は一代の革命家孫文の四十年に亙る民族解放の革命運動の中において作り上げられたものであつて、決して机上における概念や單なる思索によつて生れたものではないといふことである。この事實を除外してはいかなるものも孫文主義を正しく批判することはできない。この事實はすでに幾多の孫文主義研究者によつて指摘されてゐることであるが、我國の三民主義論者にはこの根本的認識を缺き、三民主義に對する致命的誤謬を犯してゐるものが多い。事變が發生した直後我國の一部では事變の原因が悉く三民主義にあるかの如く錯覺し、三民主義絕對排擊を唱へる者が少くなかつた。そして今日においてもなほかういふ考をもつてゐる者が少くないが、これは要するに孫文主義に對する認識の不足によるものである。

私は決して三民主義を擁護したり、又辯護せんとする者ではないが、我が國の一部の三民主義論者の如く、ただ概念的に三民主義を批判したり、否定したり、或は排擊することは、支那の三民主義者をいささかも反省せしむるものでもなければ、東亞の新らしい思想建設に何の意味を加へるものでないといふことを憂ふるのである。以上のごとき意味において、私が我が國の三民主義研究にもつ不滿は次の三點である。

第一は三民主義を孫文主義の全思想體系から抽象し、三民主義を三民主義として論評してゐる點。

第二は三民主義を現代支那の歴史的現實から抽象して觀念的に論評してゐる點。

第三は三民主義の思想史的意義の認識の稀薄な點。

以上の三つの點は今後まづ根本的に反省されなければならぬ。三民主義はすでに述べた如く、孫文主義の中心思想であることは事實であるが、孫文主義の全思想體系ではない。孫文主義には三民主義以外に重要な思想があるのみならず、三民主義は孫文主義の思想體系の中において理解されざる限り、三民主義の本質は充分理解する事はできない。

しかるに我が國の三民主義論者は、殆んど孫文主義の思想體系と關聯なしに論評してゐる傾向がある。かやうな觀點からは、決して三民主義を正しく理解することはできない。のみならず今日問題とすべきは單なる三民主義だけに止らず、孫文主義の全思想體系の究明がより切實に我々の思想的課題となりつつある。新中央政府のいはゆる修正三民主義は孫文主義の理解なしに了解することはできない問題である。

第二は三民主義乃至は孫文主義とその社會的地盤である近代支那の歴史的現實との關係である。この歴史的現實の理解なしには支那のいかなる現代思想も正しく理解することはできない。究極するところ思想は現實の反映であるとともに又現實を動かしてゆくものでもあるが、何れにするも現實の正しき理解なしには思想は到底正しく理解できないであらう。

私は先に儒教主義と歴史的支那の關係について、儒教主義を生成し、よく二千有餘年支那の指導的思想たらしめたものは歴史的支那であるが、歴史的支那を停滯せしめたものは同時に儒教主義であるといふことを述べた。が三民主義と現代支那との關係についても同樣のことがいへると思ふ。すなはち三民主義を生成せしめたものは現代支那のあらゆる條件であるが、同時に現代支那を今日にまで發展せしめたものは三民主義であるといふことも否定することは出來ない事實である。この意味において三民主義は事變を發生せしめた一つの原因であることも事實であると同時に、支那民族を今日にまで發展せしめたのも三民主義にあるといはなければならぬ。從つて三民主義は事變を發生せしめるやうな要素ももつてゐれば、又支那を近代的國家に發展せしむる要素ももつてゐるのである。だから我々が探究しなければならないのは、三民主義を頭から排擊することではなくして、三民主義のいかなる點を修正し、いかなる點を補足して東亞の新しい指導原理を確立するかといふことに、かかつてゐるのである。私はかならずしも修正論者ではない。又汪精衛氏の修正三民主義をなほ心から支持する氣にはなれないが、支那の歴史的現實を無視し

た抽象的論議はいつまで繰返しても決して建設的思想は生れないことを、もう少し反省したいと思ふ。我々が探究しなければならぬのは、支那の歴史的現實に立脚して、いかにしたら日支が一心になることができるかといふことを眞劍に考へることである。

第三には孫文主義（三民主義）の思想史的意義を認識して、感情的排擊論は是正しなければならぬ。上述の如く孫文主義を正しく理解するならば、孫文主義は明かに支那事變の有力な原因を爲してゐると同時に、近代支那の發展の原動力ともなつてゐることを認めなければならぬ。否定的一面のみを觀て、これを全面的に排擊せんとする我國の一部の論者も、肯定的一面のみを觀て否定的一面を忽視する支那の知識階級の迷盲も、何れも思想の本質を解するものではない。かやうな皮相な理解によつては東亞の新らしい指導原理を把握することはできない。我々はもつと思想の歴史的意義とその社會的根據を客觀的に檢討して、感情によつて思想を左右しないことに心掛けなければならぬ。

## 六　儒教主義と孫文主義

戴季陶は孫文の革命理論の系統を分析し、その一つの要點を次の如く説明してゐる。

「中山先生の思想は完全に中國の正統思想である。卽ち堯舜を繼承して孔孟に至つて中絶せる仁義道德の思想である。ここにおいて我等は中山先生が二千年このかた中絶せる中國道德文化の復活なることを承認することが出來る。先年ロシアの一革命家が廣東を訪れ『貴下の革命思想は如何なる基礎を有するや』と尋ねた時先生は彼に次の如く答へられた。『中國には一の正統の道德思想がある。それは堯・舜・禹・湯・文・武・周公より孔子に至つて後絶えたのである。余の思想は、すなはちこの正統思想を繼承し之を光大に發揚せんとするものである。』かのロシヤ革命家はこれを理解し得ず再びまた先生に尋ねたところ、先生はこの一句を幾回も繰返して答へられた。ここにわれ等は先生の抱負を看取すると同時にまた、先生の國民革命は中國國民文化の復興の上に立脚してゐることを明白に了解することができる。すなはち中國國民の創制力の復活であり、中國文化の世界的價値を高調して以て世界大同の基礎と爲さんとされたのである。」

この一文に示されてゐるごとく、孫文が二千年このかた中絶せる支那の道德的文化を復活しようとする遠大な理想をもつてゐたことは事實であるが、孫文主義が支那固有の道德を繼承復活したものであるといふ論證は成立することはできない。

私がここに改めて細説するまでもなく、孫文主義の本質は戴季陶の見解とは逆にむしろ支那の傳統的な儒教主義とは對照的である。對照的といふ言葉は適當でないとすれば、儒教主義を止揚發展したものが孫文主義である。たとへば民族主義にしろ、大アジア主義にしろ、民權主義にしろ、民生主義にしろ、悉く然り。そしてこの孫文主義のもつ大部分の主義が外來的のものであることもまた周知である。

だがそれは孫文主義は唯物論であるとか、或は外來主義以外の何物でもないといふ支那の唯物論者や我國の三民主義論者の見解に全面的に賛成する意味ではない。孫文主義はたしかに西洋的な物質主義に偏向してゐることは否定することはできない。だが孫文主義が道德主義的な儒教主義の缺陷を克服して現はれなければならなかつたといふ近代史的な意義を考へなければならぬ。そして一面において、儒教的性格と對照的な唯物的性格を帶びるにいたつたことは、むしろ歴史の必然的な趨勢であつたことも考へるべきである。孫文主義以外の現代支那思想といへども多かれ少かれ孫文主義的な思想的性格を帶びざるを得なかつた事實は、孫文主義の歴史觀を如實に示すものである。

孫文主義は決して儒教主義そのものではない。だが又孫文主義は單なる外來的な近代思想そのものではないといふことも認められなければならぬ。孫文主義は實はこの儒教主義と近代主義の上に立つた新らしい支那思想の典型である。だからといつて私は孫文がしばしば用ひたやうに孫文主義が孫文の獨創であるといふ意味を文字通りに承認するものではないが、孫文主義は我國の三民主義論者の論ずるが如く單なる外來思想でもなく、又支那の儒教主義者の論ずるが如き單なる復古思想でもなく、支那思想史において、確に一つの獨創的地位と意義をもつてゐることは承認せざるを得ない。

だが特に今日東亞思想の立場から檢討を要するのは、孫文主義の基底にある支那固有の道德文化、王道文化の內容である。この王道文化、道德文化は三民主義の中においては比較的强調されてゐない爲、我國の三民主義論者には等閑に附せられてゐるが、この點は改めて今日反省する必要がある。

殊に汪精衛氏の中央政權が樹立され、和平建國の思想原理として孫文主義が改めて採用され、大アジア主義が復活され、更に東亞聯盟運動が統一的に展開されるにいたつたが、これらの思想の基底に横はるものは究極するところ王道思想である。ところがこれらの思想の基底に横はるものが王道思想であつても、その王道思想の內容はかならずしも明確にされてゐるとはいへない。

これは甚だ危險なことである。すでに論じたごとく王道思想は儒教主義の政治理想であり、孫文主義は儒教主義を克服したところに思想史的意義がある。それにもかかはらず、いはゆる三民主義に代つて王道主義が何の意圖もなく現はれるといふことは不可解なことである。今日要請されてゐることは確に三民主義の克服であるが、それは直に儒教主義の復活を意味するものではない。この點をもつと檢討しなければ現代の思想的昏迷を救ふことはできぬ。三民主義を否定することは王道主義を肯定することではない。孫文主義の重要な意義はここにあるのであるが、ここでは單に儒教主義と孫文主義との關係を指摘するに止めておく。　（昭和十六年四月『支那』所載）

# 最近の支那思想界

この論文は蔡尚志氏が民國二十六年四月『中國新論』（第三卷第四五期合刊）に發表された「兩年來之思想界」を中心とし二三の論文を參照して私が編譯改作したものである。蔡尚志氏の論文は始めこれを全譯して私が先に編譯した『現代支那思想の諸問題』に採錄する積りであつたが、同氏の論文には時局柄いささか不適當なところも少くなかつたので私が適宜改作し、又增補したものであるが大體蔡尚志の論文の飜譯である。はじめ私は本書に採錄するからには多くの資料を參照してもつと完全な論文に書き改める積りでゐたのであるが、時日の都合でこれが出來ず、いささか不本意であるが、何らかの參考にはなると思つたので思ひ切つて採錄したのである。

## 一　最近の支那思想界の動向

私の觀察によれば、現代の中國思想界の動向は大體「民族鬪爭の本質」、「唯物社會の影響」、「大衆化の宣傳」の三つの點に特徴づけられるが、次にこれを略述してみよう。

**民族鬪爭の本質**　ところでこの三つの大きな問題の中何れがより重要な問題であらうか。それ

が教育欄、經濟欄、體育欄の外に、學園、藝圃、科學常識、文藝、劇刊等の副刊を發行し、『世界日報』『華北日報』と競爭してゐた。

『華北日報』は南京政府の宣傳紙で政府より毎月三千元の交附を受けてゐた爲、排日的色彩が非常に濃厚であつたが、文化新聞としては殆んど北平晨報と相並んで北京新聞界の一つの勢力を築いてゐた。

以上二三の代表的新聞の文化的側面を觀察したに過ぎないが、事變によつて之等の新聞は完全に壞滅した。天津の『大公報』が上海に移轉した事は云ふまでもない事だが北京にあつても、代表的新聞の首腦者は全部南遷した。しかも事變後は極度の言論統制をやつてゐるから『華北日報』も、『世界日報』も『北平晨報』も晨報となつて殘つてゐるが文化的色彩など影さへ見られない狀態である。將來言論統制をやり代表的新聞も成立するかも知れないが、文化新聞の存在は恐らく永久に消ゆることだらう。

（昭和十三年一月及二月『斯文』所載）

# 一、現代支那思想關係邦文參考圖書解題

## 一　思　想　一　般

邦人の支那研究で、もつとも貧困を極めてゐるのは思想的分野の研究ではないかと思はれる。從つて、邦人の著作に係る思想關係の研究書は實に寥々たる狀態である。僅に指摘しうるものは次の諸書である。

**現代支那人精神構造の研究**　大谷孝太郎著　昭和十年十二月　東亜同文書院支那研究部　菊判八七八頁

本書は東亜同文書院の教授であつた著者が、多年現地にあつて心血をそゝいだ研究で、思想關係の著作としてはユニークな存在ではあるが、方法論的には相當問題のあることは免れないやうに思はれる。

**支那思想研究**　橘樸著　昭和十一年八月　日本評論社　菊判六八四頁

本書は第一章　支那思想に關する一般的考察、第二章　宗教及び道德思想に關する考察、第三章　支那民族性に關する考察、第四章　社會改革思想に關する考察等から成り、元來統一ある計畫の下に書き上げられたものではなく、著者の長年に亙る支那及び滿洲の研究の間に、折にふれて諸種の雜誌に發表されたもので一つの體系の下に書かれたものではないが、支那思想研究家は一讀すべき優れた業績である。

次に直接思想を研究の對象としたものではないが、現代支那思想を研究する上に參考となるべき書として次の三書を紹介

しておく。

**新支那論**　池崎忠孝著　昭和十三年十月　モダン日本社　四六判二八六頁

**新支那と新生活運動**　池崎忠孝述　教學新書　昭和十四年十二月　目黒書店　三六判九二頁

（本書は前書の一部を講演したものをまとめたもので、前書があれば本書は不要であらう。）

**支那文化史觀**　出石誠彦著　昭和十五年一月　日本放送協會　三六判一九八頁

以上の外出版は稍古いが、思想關係の書として一讀すべき必要のある書物として次の二書をあげなければならぬ。

支那本日　**現代思想研究**　土田杏村著　大正十五年十月　第一書房　四六判三二〇頁

（現代支那思想を學術的に取上げたものとしては恐らく最初のものではないかと思はれる。この時期にこれだけまとめてある書は外には見當らない。）

**支那研究共和以後**　宇治田直義著　大正十年　日本評論社　四六判三一四頁

以上二書とも大正時代に書かれたもので、今日から見るともちろんいろ〳〵の點に不備不完全な點もあるが、一讀する必要はある。殊に宇治田氏のものは資料としても相當な價値をもつてゐるから、現代支那思想史を研究する者は參考にしなければならないであらう。

飜譯書には次の二書がある

**近代支那文化思想運動史**　何幹之著　日本青年外交協會譯　昭和十四年　菊判二四〇頁

本書は資料的立場から見れば、種々の缺陷はあるが、現代支那思想を俯瞰するにはもつとも手頃な入門書といふことができる。

**現代支那思想史**　郭湛波著　神谷正男譯　昭和十五年三月　生活社　菊判三二〇頁

本書の方法論には多少の異論はあると思ふが、方法論的にも資料的にも、現在のところ本書以上の現代支那思想史は外にはない。その意味において現代支那思想の研究には本書は必須の文獻であるといつても過言ではないやうに思ふ。

次に參考の爲に現代思想について書かれた重要な論文を紹介しておく。

松井　等　**現代支那思想**（岩波講座　東洋思潮内）

橋川　時雄　**現代支那思想**（理想　東洋思想特輯號　昭和十一年五月）

神谷　正男　**現代支那思潮**（アジア問題講座　思想文化篇二、昭和十四年四月）

熊野　正平　**現代支那思想**（現代支那講座第六講　社會文化　東亞同文書院支那研究部　昭和十四年九月）

藤枝　丈夫　**現代支那思想界の諸分野**（理想　現代支那思想特輯號　昭和十五年七月）

小竹　文夫　**現代支那思想**（世界精神史講座　支那精神　昭和十五年二月　理想社）

## 二　三民主義

最初に根本的な資料として三民主義がいかに紹介されてゐるかを一瞥しておく。筆者の知つてゐる限りにおいては、もつとも早く三民主義を飜譯紹介した單行書は次の書ではないかと思ふ。

**支那國民運動の指導原理**　長野朗著　昭和二年五月　ジャパンタイムス社出版部　四六判四一八頁

第一篇　三民主義、五權憲法

第二篇　建國方略、建國大綱、國民黨第一次全國代表大會

第三篇　國民黨の產業政策

本書は長野朗氏の著作となつてゐるが、右の内容が示すごとく大體孫文主義に關する代表的な重要文獻の飜譯である。

次に

**三民主義**　金井寛三譯（改造文庫第一部第四十篇）昭和四年八月　改造社　三六判二八七頁

**三民主義續篇**　金井寛三譯（改造文庫第一部第百十五篇）昭和十一年二月　三六版二九一頁

がある。本書は文庫といふ形態であつたためでもあるか、非常に多くの版を重ねてゐるが、遺憾なことは全譯でもないし、又飜譯そのものも忠實ではない。かやうな飜譯が普及することはほなはだ殘念である。

ほかに國民黨の宣傳用として

**日文三民主義**　沈覲鼎譯　昭和五年　中國國民黨中央執行委員會宣傳部　四六判四三二頁

が出版されてゐる。この飜譯の方がはるかによいが、日本では一寸簡單に手に入れることができない。

以上は大體三民主義を中心としたものであるが、孫文主義全體に關する飜譯紹介は今のところでは外務省調査部でやつた次の飜譯書以外にはない。

**孫文主義**　外務省調査部第三課譯　昭和十一年菊判三冊　上、一一四七頁　中、一〇六二頁　下、九一五頁

欲をいへば本書の飜譯には種々の難點はあるが、これだけの事業をされた外務省には敬意を表さねばならない。本書は官廳出版物で部數の少なかつたのと事變後にはかに需要が增加したために、入手することは困難であつたが、最近第一公論社から再版されたので非常に便利になつた。

**孫文全集**　外務省調査部譯編　昭和十五年　第一公論社　四六判、各冊四〇〇頁内外全七冊

（第一卷　三民主義、第二卷　建國方略、第三卷　五權憲法、國民黨政綱、國民政府建國大綱、地方自治開始、第四卷大亞細亞主義、革命方略、講演及び談話、第五卷　講演及び談話、第六卷　宣言、雜著、第七卷　電文、書翰、遺言、孫文主要著作年表、並索引）

以上の外になほ

**三民主義に就いて**　吉田龍次郎譯　昭和十三年十月　白揚社　四六判一四〇頁

**三民主義**　川田友之譯　昭和四年　以下未詳

があるが、問題にする程のものではない。

次に稍研究的なものとして次のやうなものがあるが、何れも常識的な解説を一歩も出てゐない。多少研究的と稱することのできるものは一冊もないといつて過言ではない。

**孫文の提唱せる三民主義の概概**　水野梅曉著　昭和二年四月　東亞研究會　四六判一五頁

**三民主義思想之淵源及其發達**　淺野利三郎著　昭和十四年九月　現代社　四六判九一頁

**三民主義思想發達史**　淺野利三郎著　昭和十五年三月　現代社　四六判一二一頁

（本書は前書に多少の修飾を施して出版したもので多少の參考にはなるが、良心的著作とはいへない。）

**三民主義概説**　高橋勇治著　昭和十四年十月　東亞研究會　四六判七五頁

（邦人の解説書としては本書が比較的よくまとまつてゐるが、まだ種々の缺陷があつて充分とはいへない。）

**支那革命と孫文主義**　武田熙著　昭和六年　大同館

（筆者は本書を一讀したことはあるが、今手許にないから具體的に紹介することはできない。しかし邦人の著作としては比較的初期のしかもまとまつた研究として注目すべき研究であるやうに記憶してゐる。）

**支那土地制度研究**　長野朗著　昭和五年十月　刀江書院

飜譯書は數的には多いといへないが、出版されてゐるものは、何れも夫々の意味において重要な文獻である。

**三民主義解說**　（岩波新書）　周佛海著　犬養健譯　昭和十四年六月　岩波書店　三六版　上卷二三四頁　下卷一七一頁

（本書は著名な周佛海氏の『三民主義之理論的體系』の飜譯で、三民主義文獻の中重要なものゝ一つとされてゐるものであるから、改めて紹介する必要もなからう。）

**孫文主義の哲學的基礎**　戴季陶著　（東亞問題別册第一）　中山志郎譯　昭和十四年十月　生活社　菊判五二頁

**孫文主義國家論**　（東亞問題別册第三）　林桂圃著　中山志郎譯　昭和十五年五月　生活社　菊判六〇頁

なほ以上の外

**支那社會史講話**　陶希聖著　荒尾久譯　昭和十年十二月　學藝社　菊判五〇八頁

**中國土地問題の史的發展**　聶國青著　勝谷在登譯　昭和十四年六月　慶應書房

は直接三民主義を對象として研究したものではないが、三民主義を研究するには一讀しなければならぬ文獻である。

## 三　學　術（支那學）

ひろく學術といへば人文科學、自然科學を包括するものであるが、ここでは筆者の能力とスペースの都合で支那固有の學問であるいはゆる「支那學」といふ範圍に限定しておく。がいはゆる「支那學」ももともと支那の古典を對象とするものである關係と、日本の支那學界の特殊性によつて、現代支那における支那學は殆んど紹介されてもまた研究されてもゐない。從つてこの分野で紹介すべきものは極めて少いが、代表的なものをあげれば、まづ

**近代支那の學藝**　今關天彭著　昭和六年　民友社　菊判五九四頁

に指を屈せねばならない。本書はいふまでもなく、近代支那の學術文藝等を研究したものであるが、學藝といつても一般的な學藝を綜合的に叙述したものではなく、支那固有の詩文方面の紹介に偏してゐる。

現代支那學の一般的事情を紹介したものとしては次の一書があるのみである。

**支那に於ける支那學の現狀と動向**　長瀨誠著　昭和十年六月　東亞研究會　四六判五五頁

本書は極めて小册子ではあるが、支那學の現狀を比較的によくまとめてある。欲をいへばもちろん種々の缺點があるが、類書のない今日もつともよい紹介書である。

外に單行書ではないが、『東洋文化史大系』の中にある

**現代支那の學術**　神谷正男　昭和十四年四月『東洋文化史大系』「東亞の現勢」篇

**現代支那の史學**　石田幹之助　昭和十四年四月『東洋文化史大系』「東亞の現勢」篇

は長篇ではないが、現代支那の學術を知るにはよい手引となる。

以上の外には邦人の支那學術關係の書はほとんどないが、次の二書は現代支那學を知る上には相當の參考になる。

**東洋思想の研究**　小柳司氣太著　昭和九年五月　關書院　菊判五六二頁

飜譯書も多いとはいへないが、清朝末期の學術を知るには次のものが參考になる。

**清朝學術源流概略**　羅振玉著　昭和六年　中日文化協會　四六判九六頁（滿蒙パンフレット第一五號）

**清代學術概論**　梁啓超著　渡邊秀方譯　大正十一年　讀書書院　菊判二〇七頁

現代の支那學者の著述で飜譯紹介されてゐるものには次のごときものがある。

**支那古代思想の新研究**　胡適著　楊祥蔭　內田繁薩譯　大正十四年九月　嚴松堂　菊判五二頁

**支那歷史研究法**　梁啓超著　小長谷達吉譯　昭和十三年　改造社　菊判二七一頁

**支那古代社會史論**　郭沫若著　藤枝丈夫譯　昭和六年十二月　內外社　菊判四六六頁

**支那學概論**　章太炎著　武田熙譯　昭和十二年五月　嚴松堂　菊判二八五頁

**古史辨自序**　顧頡剛著　平岡武夫譯　昭和十五年六月　創元社　四六判二三二頁

**支那近代文化史**（支那文化叢書）陳登原著　菅茂譯　昭和十五年九月　人文閣　四六判三一九頁

以上の外最近出版された

**支那社會の科學的研究**　ウイツトフオーゲル著　平野義太郎、宇佐美誠次郎譯　昭和十四年四月　岩波書店

は非常に有益な文獻である。殊に同書の附錄に採錄されてゐる

**支那における近代的社會科學文獻史**　王毓銓

は近代支那における社會科學の動向を概說したものとして唯一の手引である。

# 二、孫文主義關係文獻目錄及び解說

## 凡例

一、本稿は孫文主義に密切な關係のある華文、邦文の文獻を收錄し、その主要な文獻に解說を施したものである。

二、本稿に收錄した文獻の範圍は、孫文主義を研究せる文獻を中心に、これと密接な關係のある支那革命、中國國民黨、孫文傳、孫文著作に關する文獻を包含するものである。孫文主義に關係のある一般的な近代史や近代思想史等々は、紙面の都合ですべて割愛した。

三、本稿に收錄した文獻は、主に華文を中心とし、これに邦文の主要な文獻を附加した。但しこれは單行書又はレポート類のみで、雜誌論文は重要なものと否とにかかはらずすべて割愛した。

四、本稿に收錄した文獻の中筆者が直接見た文獻、又は充分內容を知ることのできたものは、できる限り詳細に記載したが、他の目錄類から轉錄し、內容を充分知ることのできなかつたものは、殘念ながら書名と著者名のみを記載したものもある。しかしこれらは何れ充分調査の上他の機會に補充したいと考へてゐる。

六、本稿に解說した文獻の重要なものは詳細に、しからざるものは簡略にする方針であつたが、選擇した文獻を全部目を通すことは現在のところ不可能であるから、かならずしもその標準は守られてゐない。但し筆者が目を通すことのできたものはなるべく詳細に紹介しておいた。邦文の文獻はことさらに解說する必要のないものも多いが、筆者の適當と認めたも